



19.-23. Oktober 2016  
**FRANKFURTER  
BUCHMESSE**  
Ehregast Flandern | Niederlande

## フランクフルトブックフェア 2016 ～ニュースダイジェスト～



先月開催されたフランクフルトブックフェアで見聞きしたニュースをダイジェストでお送り致します。小社の立場上、翻訳出版に関するトピックが多くなってしまいましたが、世界の出版界の動向をつかむうえで少しでも参考になれば幸いです！

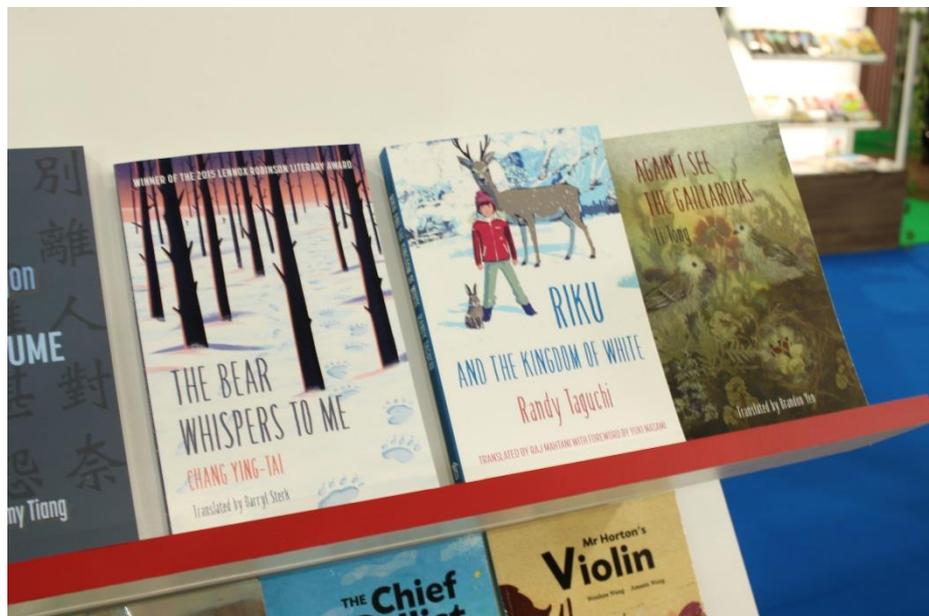
### 日本作品の動向

『人生がときめく片づけの魔法』（近藤麻理恵著／サンマーク出版）を世界的なベストセラーにしたニューヨークのエージェントが、『火花』（又吉直樹著／文藝春秋）をフランクフルトブックフェアで展開。日本では驚異的なヒットとなったが、日本特有の「お笑い」事情や芸人の世界が他の国々にどう受け入れられるか、注目したいところ。

『64（ロクヨン）』（横山秀夫著／文藝春秋）が、優れた推理小説に贈られるインターナショナル・ダガー賞の最終候補に残ったことが話題に。日本人の作品が最終候補に残るのは、翻訳部門が設けられた2006年以降で初めて。惜しくも受賞は逃したものの、日本の警察小説がこのような栄誉ある賞の最終候補に残ったことは快挙といえるのではないだろうか。

## ますます高まる翻訳書への注目度

シンガポールとロンドンを拠点にアジアの文学を世界に発信する出版社 Balestier Press によれば、英語圏の人々があえて翻訳書を選ぶようになってきているという。そのため、翻訳者名を表紙に出すようにしている、と話していたのが興味深かった。かつては翻訳者名はそもそも掲載されなかったり、掲載されるとしても表紙ではない例が多かったことを考えると、英語圏の人々の翻訳書に対する考え方が変わってきていることがうかがえる。



Balestier Press のブースにて。弊社を通して刊行された田口ランディ著『リクと白の王国』の英訳版。翻訳者である Raj Mahtani 氏の名前が表紙に。

## ロシア女性は「日本女性の美の秘訣」が気になっている

ロシアの大手出版社 Eksmo のライセンス担当者によれば、フランス女性のブームはもう終わり。これからは「日本女性の美」だそう。日本の女性がいくつになっても健康で若々しく見える秘訣、美しい肌をつくるマッサージなどがロシアで注目を高めているとのこと。

## Publishing for Love: Literary Translation in the USA

*Publishing Perspectives*, Thursday 20 October 2016, p. 10

Two Lines Press (サンフランシスコ) の編集長 C. J. Evans 氏と、Bellevue Literary Press (ニューヨーク) の代表 Erika Goldman 氏が、19 日の Publishing Perspectives 主催のセミナーに登壇し、翻訳出版に対する思いを語った。

両社とも翻訳書専門の非営利出版社。年間 8 タイトル発行している Bellevue Literary Press の Goldman 氏は「翻訳書への愛だけでこの事業をやっている」と言い、年間 4~6 タイトルを発行する Two Lines Press の Evans 氏も、「これらのタイトルにすべての心血を注いでいる」と語る。

両社とも好きな翻訳書を手がけられる自由を謳歌する一方、翻訳書ならではの困難も抱えている。翻訳出版の助成を受けるための手続きは煩雑で、「翻訳出版の決め手となるサンプル翻訳だけでは判断に困る」(Goldman 氏)。一方 Evans 氏は、元々権利元が全訳を用意することは期待しておらず、翻訳者からの情報提供や彼らとのネットワーク構築が重要という。

Evans 氏はまた、翻訳書に対する英語圏の読者の期待が変化してきているとも語る。ひと昔前は、翻訳書は遠い彼の国の事情を知る手がかりとして読まれていたが、今は読者が作品自体に魅せられてい

るそうだ。それゆえ、制作時には英語圏の読者向けにしっかり編集するも、オリジナルの持つスタイルを大切にしている。

## ブッカー賞の真実

*The Bookseller Daily*, Wednesday 19 October 2016, p. 27

世界的に権威のある文学賞、ブッカー賞を取ることを夢見る出版社は多いだろう。当然、受賞すれば本の売れ行きや、海外への版權販売への期待が高まる。しかしこのブッカー賞、実際には出版社側にいろいろと金銭的負担がかかることはあまり知られていない。

たとえば、賞のロングリストにノミネートされた時点で、各版元は10日以内に最低1000部増刷するよう求められる。ショートリストに残るとさらに、パブリシティ代として5000ポンドをブッカー賞側に支払わなくてはならない。そしてブッカー賞を受賞した場合、追加で5000ポンドが請求される。大手出版社であれば痛くもかゆくもない額かもしれないが、独立系の小規模出版社にとってはかなりの負担だ。

北ノーフォークにあるSalt Publishingの代表、Christopher Hamilton-Emery氏は、Wyl Menmuir著『The Many』が今年のブッカー賞のロングリストに選出された経験から以下のように語る。

「とにかくブッカー賞は突発的に持ち出し金が必要になるから、事前にいつもより多めに資金を準備しておくことさ」

そして、お金はかかっても、きっちり乗り切れることができれば、ブッカー賞には十分な見返りがあると付け加えた。

## 年次ライツミーティング

*Publishers Weekly: Frankfurt Show Daily*, Thursday 20 October 2016, p. 4

世界最大の出版市場を誇るアメリカにおいて翻訳書が占める割合は未だに低く、文学作品に限って見ると、総刊行点数のうち翻訳書はたったの0.7%である。フランスでは14%であることを考えると、アメリカが翻訳出版に対していかに消極的かがわかるだろう。

そんなアメリカの翻訳出版は、これまでNew Directions、Dalkey Archive、Archipelago Books等に支えられてきたが、今では、2010年に参入したAmazonCrossingがアメリカ随一の翻訳点数を誇る。そして、同社によって翻訳点数は順調に増えているものの、翻訳後進国のアメリカに対する世界の出版界の目は厳しい。「とにかくアメリカ以外の国に版權販売の実績を築き上げること。そうして初めて腰の重いアメリカもようやく動きだすだろう」とは関係者の弁。

## ミレニアル世代によるミレニアル世代のためのインプリント

*Publishing Perspectives*, Wednesday 19 October 2016, p. 12

近年日本にも浸透してきている「ミレニアル」。アメリカではこれをキーワードとする書籍が増えている。Pantera Pressは今年のフランクフルトブックフェアで、新たなインプリントLost the Plotをローンチすることを発表した。「ミレニアル世代が執筆、デザインする、ミレニアル世代のための

書籍」を刊行する予定だ。

今回発表された6冊は、オンラインデートで交わされたメッセージ集、喫煙をやめるためのぬり絵、ドナルド・トランプの名言集（中身はすべて白紙）など。各タイトルの詳細は以下のリンクで紹介されている。

[https://www.panterapress.com.au/files/media/lost\\_the\\_plot\\_2016.pdf](https://www.panterapress.com.au/files/media/lost_the_plot_2016.pdf)

## アシェット社がイギリスの大手モバイルゲーム会社を買収

*The Bookseller Daily*, Friday 21 October 2016, p. 27

アシェット社がイギリスの大手モバイルゲーム会社 Neon Play を買収した。Neon Play はグロスタシャーに拠点を置き、25名のスタッフを抱えるゲームスタジオで、過去2年間で6000万ダウンロードを記録したことで、イギリスのモバイルゲームスタジオの中ではトップ50に入るといわれている。

この度の買収理由について、Neon Play の創業者である Oli Christie はこう語る。

「アシェットは本を超えた多様な情報媒体へと業務拡大することを視野に入れており、マーケットの規模が大きいモバイルゲームに目を付けた。ゲームも、“ストーリーを伝える”という意味では本と同じである」。そして、出版業界がモバイルゲーム業界から学ぶこととしては、「本は一度出版したら終わり。一方でモバイルゲームでは、オーディエンスを分析し、オーディエンスの要望に合わせるためにコンテンツをアップデートし続け、“サービス”としてゲームを提供する。マインドセットはまったく異なるが、マネタイズの面ではこちらの方法が有効だ」。

今後はアシェット社と連携しながら、プロダクトの開発を進めていくという。

## 地方へ移るイギリスの出版社

*The Bookseller Daily*, Friday 21 October 2016, p. 22

イギリスではロンドン以外に拠点を置く出版社が増えている。翻訳書やイギリスの現代作家の作品を多く手がける And Other Stories は、ロンドン郊外から北イングランドのシェフィールドに移ることを発表した。シェフィールドは人口65万人の街で、マンチェスターやリーズといった比較的大きな地方都市にもほど近い。

ロンドンから北部へ移るといって出版社は And Other Stories だけではない。ブッカー国際賞を受賞したハン・ガン著『肉食主義者』の英訳者が立ち上げた翻訳専門の出版社 Tilted Axis も同じくシェフィールドへ、Saraband はスコットランドのグラスゴーからマンチェスターへと拠点を移すことになっている（この場合は北上ではなく南下ではあるが）。

And Other Stories は元々イングランド北部にある Comma Press (マンチェスター) や Peepal Tree Press (リーズ)、Dead Ink Press (リバプール) といった小規模な出版社が形成する Northern Fiction Alliance (イングランド北部フィクション組合) に加わり、今後活動を広げていく予定だ。また、地元大学の卒業生に積極的に雇用の機会を与え、イングランド北部の出版業を活性化させ、出版業界での就職を希望する若者たちにロンドン以外の選択肢を与えることを目標にしているという。

近年ロンドンの家賃・物価はますます上昇する傾向にある。イングランド北部は家賃も物価もロンド

ンに比べてはるかに安く、音楽、演劇、文学といったさまざまなアート活動がさかんだ。今後、ロンドンを中心としていたイギリス出版界を取り巻く環境は変わっていくことが予想される。

大都市から離れた場所で成功している出版社の例は世界中にある。たとえば、ミネアポリスの Consortium や Coffee House Press。フランスのプロヴァンス地方にある Actes Sud など。さらに、各都市でさまざまな工業が発達しているドイツでは、Carl Hanser はミュンヘン、Fischer はフランクフルト、Suhrkamp はベルリン、Rowohlt はハンブルグと、老舗出版社が国内に点在している。

## 『菜食主義者』のハン・ガンが韓国の出版界にもたらした影響

*Publishers Weekly: Frankfurt Show Daily, Thursday 20 October 2016, p. 12*

今年、韓国の小説家ハン・ガン氏が『菜食主義者』（邦訳は cuon より 2011 年に刊行、英題『The Vegetarian』）でブッカー国際賞を受賞したことで、韓国発の書籍への関心が高まり、世界が韓国を見る目とともに、韓国の人々が自国を見る目も変わった。世界各国の出版社が韓国の本を求め、韓国の書籍の英語版が韓国国内で飛ぶように売れている。今年のソウルブックフェアにはこれまでにない人数の海外エージェントや編集者が参加しており、今後ソウルが出版界の注目都市となることが予想される。

『The Vegetarian』の売り上げは、アメリカより韓国内でのほうが高い。さらに、『The Vegetarian』だけではなく、『庭を出ためんどり』（ファン・ソンミ著）や『母をお願い』（シン・ギョンスク著）も同じく韓国で英語版が売れており、世界が韓国の本を発掘すればするほど、韓国およびアジア各国の読者が英語版を通して韓国の本を発掘するという現象が起きている。実際、韓国の著名作家による本の中には、英語で刊行されてからベストセラーとなったものもあるという。

来年 3 月には、北朝鮮との複雑な問題を扱った『告発』（バンジ著、邦訳はかざひの文庫より 2016 年に刊行）が、英語を含む 16 か国語で刊行される予定になっており、またしても韓国の書籍が世界中で話題となることは間違いないだろう。

永田衣緒菜／近谷浩二

Copyright(c) 2016 TranNet KK all rights reserved



株式会社トランネット  
〒106-0046 東京都港区元麻布 3-1-35  
VORT 元麻布 4 階  
<http://www.tranet.co.jp>